

孤独死 悲し

業者が後始末

一人暮らしのお年寄りが人知れず亡くなる「孤独死」が、独居世帯の増加とともに増え続けている。孤立した生活のために死後しばらくたってからの発見も後を絶たない。そうした部屋の片付けで、専門業者への依頼が急増している。核家族化と少子化が進み、お年寄りを看取って家族で遺品を整理する余裕が失われてきているようだ。

(曹喜郁)



孤独死した男性の部屋を片づける遺品整理業者一福岡県福津市で、柏木和彦撮影

▼死後10日経過
福岡県福津市の住宅街にある2階建ての一戸建

遺品の整理 依頼が急増

▼大都市圏8割

キーパーズの吉田太一社長は、引越し業をへて02年に遺品整理業を始めた。専門に全国展開する業者は他になく、この1年間の依頼は全国で約2300件、前年より15%増えた。6割が「孤独死」。その3分の1は死後3日以上たった。依頼者は死者の子のほか、

か、おいやめいが多い。身寄りがなく、賃貸の部屋なら大家が頼むこともある。地域は、東京、大阪、名古屋、福岡の大都市圏で8割にのぼる。「地方では遺品整理業者任せにすることに違和感がある。が、忙しい都会や、縁の薄い親類はそろも言っていられない。孤独死は資産の有無とは関係がない。親類や近所

とどんな付き合いをしていくかにかかっている」厚生労働省の統計では、65歳以上の独居世帯は00年の30.8万から05年は40.7万に急増。東京都監察医務院の検視統計では、都内で自宅で死亡した独居老人(65歳以上)は01年の1325人から05年は1860人に増えた。猛暑だったこの夏はさらに増えたとみら

て住宅を、9月末に訪ねた。2日前に、1人で住む男性68が死亡しているのが見つかった。心筋梗塞による突然死から約10日たった。遺体は運び出されていったが、室内には異臭がこもっていた。しかし、台所や洗面所は整然としていて、きちょうめんな暮らしぶりが伝わってくる。電灯とテレビがつけっぱなしになっているのを

近所の人が不審に思い、家族に連絡した。亡くなった男性は、大手企業を定年退職。近所付き合いがほとんどなかった。糖尿病の持病があったが「年寄り扱いをするな」が口癖で、一人暮らしを望んでいた。同市内で別居する長男(36)は「連絡をもっと頻繁に取っておけばよかった」と顔をゆがめた。ただ、傷んだ遺体がシ

ョクで、悲しみを感じる余裕がない。途方に暮れていると、葬儀社から遺品整理の専門会社「キーパーズ」(本社・愛知県刈谷市)を紹介された。家屋の中身すべての処分と、消臭機の2週間の運転費用など、計約60万円。作業員5人が家具や服、量など一切合切を4トトラックで運び出し、家の権利書もカバンの中から見つけてくれた。

▼生きるマナー

逝く側も残される側も悲劇は避けたい。どうすればいいのか。

上野千鶴子東京大学教授(社会学)は、近著「おひとりさまの老後」の中で「おひとりさまの死に方」を提案している。それは、前向きな老後のシングル生活を提案する延長線上にある。密でマメなコンタクトを取る人間関係を作る。残して困るのは早めに処分。葬式などの費用は謝礼とともに用意。――。

「問題は、2、3日顔を見ないと心配してくる友人をつくれるかどうか。これは生きる知恵であり、マナーだと思う」残される側にはこんな言葉を贈る。「一人で暮らしていれば、一人で死ぬ覚悟はとっくにできている。『一人で死なせた』は、遺された側のこたわりにすぎない」